

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11533

研究課題名（和文）学校体育連盟の歴史社会学：運動部活動の過熱化に与えた影響の考察

研究課題名（英文）Historical Sociology of School Sports Federations: An Examination about the Influence on Overheating of Extracurricular Sports Activities

研究代表者

中澤 篤史（Nakazawa, Atsushi）

早稲田大学・スポーツ科学大学院・教授

研究者番号：70547520

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本の「部活」は、なぜこれほど盛んなのか。日本のスポーツ文化は、地域社会のクラブではなく、学校の運動部活動によって支えられてきた。これまで研究代表者は、運動部活動の歴史と現状を分析し、スポーツと教育の日本特長的な関係を考察してきた。その流れを踏まえて本研究プロジェクトでは、学校体育連盟が運営する競技大会に注目し、その成立と展開のプロセスを歴史社会学的に分析し、それらが運動部活動の拡大と過熱化に与えた影響を考察することをめざした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、運動部活動が拡大し過熱化した理由を考察するために、先行研究が十分に分析してこなかった運動部活動の競技大会と学校体育連盟を取り上げて、それらを成立させてきた歴史的・社会的・経済的文脈を明らかにする点に学術的意義がある。また近年、過熱化が問題視されている運動部活動のあり方について、その原因と見なされる競技大会の成立背景を探ることで問題解決への展望を開く点で社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Why are “extracurricular sports activities” so popular in Japan? Japan's sports culture has been supported by school clubs, not by community clubs. Until now, the principal investigator has analyzed the history and current status of such extracurricular sports activities and examined the Japan-specific relationship between sports and education. Based on these achievements, this research project focused on athletic meets run by school sports federations, and aimed to analyze the process of their establishment and development from a historical-sociological perspective, and to consider the impact they had on the expansion and overheating of extracurricular sports activities.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：運動部活動 学校体育連盟 競技大会 過熱化 歴史 社会学

1. 研究開始当初の背景

日本の「部活」は、なぜこれほど盛んなのか。日本では、青少年のスポーツ活動の中心は、学校の運動部活動である。ただし運動部活動がこれほど大規模に成立している国は、日本以外に無い。これまで応募者は、日本の運動部活動が、歴史的にどう拡大してきたのか、現在どう維持されているのかを実証的に探究してきた。

その流れを踏まえて本研究プロジェクトでは、先行研究が十分に扱ってこなかった競技大会を運営する学校体育連盟に注目した。とくに全国中学校総合体育大会を運営する日本中学校体育連盟を取り上げて集中的に分析することにした。こうした学校体育連盟は、国の政策・制度とは相対的に独立しながら競技大会を運営し、それが定める規則や日程によって学校現場に強い影響を与えており、運動部活動が過熱化する理由を考える上で見過ごせない。であれば、学校体育連盟と競技大会の成立と展開のプロセスを分析することで、運動部活動が拡大し過熱化してきた背景の一端を明らかにできるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

以上を踏まえて本研究の目的は、運動部活動の競技大会とそれを運営する学校体育連盟がどう成立し展開してきたかを分析し、運動部活動が拡大し過熱化した理由を考察することであった。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、次の方法的枠組を整えた。すなわち、先行研究の検討、戦前中等学校競技大会の資料蒐集・分析、戦後中学校・高校競技大会の資料蒐集・分析、中学校体育連盟の資料蒐集・分析、全国中学校体育大会に関する資料蒐集・分析、である。それらを順に達成しながら、得られた研究成果を総括した。

4. 研究成果

4-1. 研究成果全体の整理

上記で示した方法的枠組みに沿って、達成された研究成果全体は次のように整理できる。

1) 先行研究の検討については、スポーツ科学、体育学、教育学分野の歴史的研究を中心に検討し、運動部活動の歴史理解の到達点と課題を確認した。

2) 戦前中等学校競技大会の資料蒐集・分析については、戦後史を中心に扱う本研究の前提を整える作業であった。戦後史を理解するためには、運動部活動と競技大会の戦前からのつながりを検討しておく必要があった。

3) 戦後中学校・高等学校競技大会の資料蒐集・分析については、各競技の大会開催状況を網羅的に把握できるよう資料蒐集し、戦後から現在までに、各競技でどのような大会がいつ、どれくらい開催されてきたのかについて、経年的な変化を追跡するよう分析した。これは、本研究全体の背景を整理する作業であった。

4) 中学校体育連盟の資料蒐集・分析については、日本中学校体育連盟および都道府県中学校体育連盟の組織のあり方、およびそれらが運営する競技大会に関して、関連する資料を蒐集し、分析を行った。この分析の成果は、本研究プロジェクトの主要な知見であり後述する。

5) 全国中学校体育大会の資料蒐集・分析については、日本中学校体育連盟が主催するこの大会が、どのような歴史の中で成立したのかについて資料を蒐集し、分析を行った。この分析の成果も、本研究プロジェクトの主要な知見であり後述する。

4-2. 主要な知見①

研究成果の4)は、本研究プロジェクトの主要な知見であり、次のようにまとめられる。

この研究の目的は、中学校体育連盟の形成過程を実証的に記述しながら、教育と競技に対する中学校体育連盟の意味づけ方を明らかにすることであった。それを通じて、運動部活動における教育と競技の関係性を再考することをめざした。

先行研究は、運動部活動の教育的側面と競技的側面は互いに対立していて、その競技的側面が前面に出ることで教育的側面が蔑ろにされて問題が生じると指摘してきた。しかし、この見立てでは、運動部活動の歴史や問題を十分に理解できない。なぜならここで取り上げる中学校体育連盟の存在とその取り組みが示すように、実際は競技大会が教育活動として広く活発に行われて、運動部活動における教育と競技は強く結び付けられているからである。では、この中学校体育連盟は、どのような歴史的背景の中で成立したのか、そして一見すると対立しているように見える教育と競技をなぜ、どのように結びつけているのか。これらの問いを、全国中学校体育連盟発行の資料を主に用いて検討した。

分析結果は以下の通りであった。新制中学校が発足した1947年から、都道府県レベルでの中学校体育連盟の組織化があった。このプロセスには、文部省通達の影響と体育教師の動きに加えて、校長会や教育委員会、競技団体の関与があった。その後1955年に全国中学校体育連盟が設

立され、文部省通達に沿って、競技団体に対抗しながら競技大会の抑制がめざされた。そして1967年に、すべての都道府県で中学校体育連盟が加盟し、中学校体育連盟は実質的な全国組織化を達成した。

以上から、中学校体育連盟が一貫して競技大会の教育的活用という理念の実現に向けて、教育と競技を結び付けようとしてきたことがわかった。中学校体育連盟は競技団体を仮想敵としながら、それへの反動を契機として、競技大会システムを運動部活動および学校教育の内部に取り込んだということである。この研究成果が示唆するのは、運動部活動の歴史を教育と競技が互いに対立するプロセスとして捉える見方を再考しなければならない可能性であった。

4-3. 主要な知見②

研究成果の5)も、もうひとつの主要な知見であり、次のようにまとめられる。

運動部活動の過剰なあり方が問題視されているが、その象徴が、日本中学校体育連盟が開催する全国中学校体育大会である。この大会はどのように成立したのか。この研究の目的は全国中学校体育大会の成立過程を分析し、運動部活動における教育と競技の関係性を考察することであった。

先行研究は、全国大会が成立した理由を、競技団体の要望に沿った対外競技基準の緩和に求めて、その経緯を競技が教育を蔑ろにするプロセスとして捉えてきた。この捉え方には、教育と競技が互いに相容れない二項対立的な関係にあるという前提があり、具体的な争点として、教育的平等主義と競技的選抜主義の相克が問題視された。

しかし、その捉え方では、全国大会を抑制しようとしていた中学校体育連盟がなぜ一転して全国中学校体育大会を開催したのかが理解できない。そこでこの研究では、その文脈を中学校体育連盟内部の視点から見直すことで、全国大会を開催しはじめた競技団体に対抗しながら、そこに見出された教育問題を解決すべく、全国大会の再編成に乗り出す中学校体育連盟の能動的な側面を明らかにした。

中学校体育連盟にとって全国大会の成立過程とは、競技が教育を蔑ろにするプロセスではなく、競技を通じて教育を達成しようとするプロセスであった。ならば中学校体育連盟は、そこで教育的平等主義と競技的選抜主義の相克をどう意味づけていたのか。

中学校体育連盟は、競技的選抜主義に意義を見出しながら、同時に教育的平等主義も手放そうとはしなかった。むしろ競技的選抜主義の意義を正当化するために、より一層教育的平等主義を重視した。全国大会は一部のエリート選手だけではなく、すべての生徒に平等に開かれねばならず、すべての生徒が参加した上で勝者が選り抜かれるからこそ意義があると解釈された。このように中学校体育連盟の意味づけ方においては、教育的平等主義と競技的選抜主義の相克が乗り越えられた。その結果として全国中学校体育大会が成立した。ここに中学校運動部活動が過熱化していく歴史的転換点があった。

4-4. 総括と展望

以上を踏まえながら、本研究プロジェクトの総括として、運動部活動の競技大会とそれを運営する学校体育連盟が成立・展開してきた歴史的プロセスを分析し、それらが運動部活動の拡大と過熱化に与えた影響を総合的に考察した。こうした本研究プロジェクトの成果は、新たに探究すべき学術的課題を生み出すことにもつながり、2024年度からは「ユーススポーツ競技システムの成立・拡大・展開:教育と競技の関係を再考する」(基盤研究C)という新規研究プロジェクトを開始する。より研究を発展させて、日本のスポーツ文化を支えるユーススポーツのありように深く広く迫りたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中澤篤史, 星野映	4. 巻 19
2. 論文標題 中学生・高校生年代における全国競技大会の展開（1946-2001）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 スポーツ科学研究	6. 最初と最後の頁 42-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中澤篤史	4. 巻 67
2. 論文標題 全国中学校体育大会の成立過程：中学校体育連盟は教育的平等主義と競技的選抜主義の相克をどう意味づけたのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育学研究	6. 最初と最後の頁 501-517
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中澤篤史	4. 巻 66
2. 論文標題 中学校体育連盟の形成過程（1947 - 1967）：運動部活動における教育と競技の関係性を再考する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体育学研究	6. 最初と最後の頁 497-514
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5432/jjpehss.20128	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中澤篤史	4. 巻 63
2. 論文標題 運動部活動はなぜ過熱化したか：日本中学校体育連盟と全国中学校体育大会の歴史的展開（教育史学会第63回大会「スポーツと人間形成：教育とスポーツの関係史を問いなおす」シンポジウム記録）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本の教育史学・教育史学会紀要	6. 最初と最後の頁 114-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤篤史・鈴木楓太	4. 巻 17
2. 論文標題 戦前日本における中等学校競技大会の展開 朝日新聞社編『運動年鑑』（1919 - 1943）を資料として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 スポーツ科学研究	6. 最初と最後の頁 44-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤篤史	4. 巻 70（6）
2. 論文標題 新型コロナウイルスと選抜高校野球大会	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 398-403
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤篤史	4. 巻 49（4）
2. 論文標題 部活クラスター	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 178-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤篤史	4. 巻 47（7）
2. 論文標題 「ブラック部活」を乗り越えて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 35-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤篤史	4. 巻 17(2)
2. 論文標題 生徒が直面する現実、生徒が求める理想	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 子どもと発育発達	6. 最初と最後の頁 76-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤篤史	4. 巻 677
2. 論文標題 それでも「部活動廃止」と言えない理由	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 青少年問題	6. 最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 中澤篤史, 小野雄大
2. 発表標題 ユース年代の全国競技大会に関する基礎的検討
3. 学会等名 日本スポーツ社会学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Atsushi NAKAZAWA
2. 発表標題 Sports are for Everybody: Histories of Extracurricular Athletics and Disability Inclusion in Japan and US
3. 学会等名 University of California, Los Angeles, Disability Studies Inclusion Labs (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中澤篤史, 星野映
2. 発表標題 中学生・高校生年代の競技大会の展開：1946年から2001年まで
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中澤篤史・星野映
2. 発表標題 中学生・高校生年代の競技大会の変遷に関する資料検討
3. 学会等名 日本スポーツ社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中澤篤史・星野映
2. 発表標題 戦後の中学校・高校競技大会に関する資料検討
3. 学会等名 日本スポーツ社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Atsushi Nakazawa
2. 発表標題 Toward a global history of school sport: A socio-cultural examination of its development in the United States of America in the early 20th century
3. 学会等名 World congress of sociology of sport (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中澤篤史
2. 発表標題 全国中学校体育大会の拡大過程と財務状況に関する分析
3. 学会等名 日本体育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中澤篤史
2. 発表標題 福澤諭吉の時代における学生スポーツ（シンポジウム：自立・自律した個人に価値を置く社会における体育・スポーツー福澤諭吉とその時代に手がかりを求めてー）
3. 学会等名 日本体育学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中澤篤史
2. 発表標題 運動部活動はなぜ過熱化したか（シンポジウム：スポーツと人間形成ー教育とスポーツの関係史を問い直す）
3. 学会等名 教育史学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 中澤篤史	4. 発行年 2022年
2. 出版社 杏林書院	5. 総ページ数 217
3. 書名 「コロナ禍における運動部活動：一斉休校・大会中止・部活クラスター」高峰修ほか編『現代社会とスポーツの社会学』	

1. 著者名 中澤篤史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 創文企画	5. 総ページ数 265
3. 書名 「日本のユーススポーツ」日本スポーツ社会学会編集企画委員会編『2020東京オリンピック・パラリンピックを社会学する』	

1. 著者名 中澤篤史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 220
3. 書名 「学生スポーツ」井上俊・菊幸一編『よくわかるスポーツ文化論（改訂版）』	

1. 著者名 中澤篤史、内田良	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 195
3. 書名 「ハッピーな部活」のつくり方	

1. 著者名 岡崎勝、赤田圭亮、内田良、加藤潤、中澤篤史ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 200
3. 書名 わたしたちのホンネで語ろう教員の働き方改革	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------